

上の制約により、フリ仮名は誤読のおそれのないものは全部省略せざるをえなかつた。

(14) 「おんをかうぶりて、おんをしらざるは、うへ木のとのり、えだをからすがとし、とくをかうぶりて、とくをしらぬは、野のしかの、くさをからすがとし」(村口小型本)

(15) 「室町時代物語集」第三、一九五頁。

(16) この事については、村口本を見るまえに「天神御本地考」(名古屋大学国語国文学3)で推定したことがある。

(17) 注8参照。(静岡県立女子短大講師)

追記… 本日29頁に記した広島大学国語国文学教室蔵「天神之御本地」のフィルムを頂いた。該本は安楽寺本系北野天神縁起の内、慶大本と同一系統に属するもの(やや先行する)で、お伽草子ではなかつた。しかし、38頁に記したように、この系統の本文は、お伽草子へ頼れてゆく過渡のものとして注意されるもので、その一本を加え得たことは多大の喜びとするところである。広島大学図書館及び名古屋大学図書館当局に感謝すると共に、小生の怠惰と不明とを恥じるものである。

(四十一年六月九日 記)

北条団水の三千風追悼文と鳴弦之書

岡本勝

一、はじめに

大淀三千風は、寛永十六年勢州飯野郡射和村(現在、三重県松阪市射和)の商家に生まれ、宝永四年一月八日郷里射和村に六十九歳を一期としてその生涯を閉じた。しかし、寛文九年から天和三年までの十五年にわたる仙台居住、天和三年四月から元禄三年まで七年におよぶ「日本行脚文集」の旅、晩年の大磯嶋立庵での生活と生涯の大半を異郷に過し、郷里に在ることが少なかつたので、ともすると、比較的そこに留まることの長期にわたる故をもつて、又、その地で彼の生涯において最もはなやかな出来事である三千句独吟が試みられたということによつて、「仙台の三千風」と記憶されることが多かつたのである。だが、郷里射和には三千風の墓や過去帳、三千風関係の資料が今なお若干残つており、三千風研究にはまず射和に残る資料の調査が必要だろふと思われる。近時私は、西鶴の周辺の俳人の一人として、又西鶴と

ほとんど時を同じくする一地方俳人として大淀三千風に興味をもち、射和にある三千風関係資料の調査をはじめたのであるが、その調査中、はからずも団水の署名をもつ三千風追悼文を発見した。小奉書(縦三十三種、横四十五種)一枚の短い文章であるが、文中俳諧史にかかわりをもつ部分もあるので、その全文をここに紹介し、いささか私見を述べてみたいと思う。

二、団水の三千風追悼文

聞 計音 綴 轆 壽 并 滑 箒 一 句

先生三千風ハそのほりかねのおよすけにしてむくつきき我にまてねもころにいつくしまれもとより此道の先達にていとたのもしき諫めおほき中にはかりなき飲酒せしをたゞ器ひとつにさためよとせあまりはや七とせのまへにしめされしより花農月夕さかつきとることに忘るゝ事なくあはて過にしとし月もその一言ゆへ

に折ふしことに面かけはなるゝことなく師父ふたつの恩を荷ひぬるに此春和海のぬしより此世をたち出てよもつの国にいたりぬと聞にはかなくむねとよろき道なき世のならひへ今さらのことならねと鶴林のゆふへハ談果の羅漢さへ悲願の声五天竺にひゞきぬるとかや愚かなる身へやるかたいよ／＼なかりき紅涙とゞまりかたきをおしやりて法華経を説讀しあらかしめの諫めをおもひ出て酒を断事三三

鴨立沢の故庵までおもひつゝけて

三夕に数そふうさや春ひとつ

困水淨帥

右が困水の署名をもつ三千風追悼文の全文である。文中の一二の語句に註釈をつけてみると、まず「ぼうかね」であるが、「ぼうかね」であつて「むこかね」と同じように「やがて僧になる人」という意味であろう、という御教示を石川徹氏よりいただいたので、それに従いたい。又、「和海」とあるのは紅風軒和海のことであつて、貞徳追善集「鳥羽蓮花」の編者として知られているが、その他のことについては未詳である。ただ、註一和海は京都に住していたらしいが、三千風とは師弟に近い関係にあり、三千風臨終の場もしくは葬儀の場に、逸早く臨

け付けているのではないかと想像されるのである。というのは、困水の署名をもつ三千風追悼文の他に、註一椿亭想叟署名のものも現存するのであるが、その中に、

空永四の正月八日東往居士三千風遷化のよし皇都の和海がいひこしたるに

とあり、和海が三千風の死を知らせたのは、困水だけではないことを知りうるのである。そこで、もうすこし想像を逞しくするならば、和海が三千風と生前誼のあつた俳人仲間、三千風の死を伝えたと考えられるのではないだろうか。そう考へるならば、京都の和海が伊勢の射和で亡くなつた三千風のことを、同じ京都に住む困水より早く知つていたことにも説明がつくのである。即ち、三千風と和海とは師弟に近い関係にあり、三千風の死に際して逸早く駆け付け、京に帰るや三千風と生前誼のあつた俳人達にその死を伝えた、というように。

その點論を補強するため、三千風と和海が師弟に近い関係にあつたのではないかと想像される三つの事実を指摘しておく。まず第一に、元禄八年の序文をもつ和海編の「鳥羽蓮花」に三千風が跋文を与えていること、第二に、元禄十四年刊の「三千風笈さがし」の序において三千風は、

此節田鳥集の板行校合にひまなきにこれに序せよと和海にせめられしまゝに（引用は一枚）俳文学大系第八巻随筆編による。以下同前

と述べ、跋文において和海も、

去夏かの袋を虫ほしせんとかき捨られし反古どもを見れハ一枚／＼なからおほくの人のかたみ種としていさめあり味ふ事あり又笑ひもありうれしや吾仏といたきかゝへしか嗚呼独見んもさうだ／＼しく此次テに梓せんとなぬらひうかひひしか思ひきつて翁の顔に目くぼせすれへいやとよそれへよな余が死での跡のまつりにと

思ひしかはや逆修のとらひかあふそれもよし／＼とてあまさへ言下にかるわざの序をたうびしうちいただきやがて笈さがしと名のりしとてもはやひが得じやとて此元禄後の巳のむつみ月

洛下紅風軒和海拾ひためしを（傍点筆者）

とあって、「三千風笈さがし」が和海の編にかかるとを示していること、以上の二点によつても、三千風と和海が単なる俳人仲間以上の近しさにあることが想像されるが、さらに元禄十四年刊「和漢田鳥集」の跋文において、和海が三千風のことを「我師風居士」と呼んでいるのを見れば、二人がほぼ師弟に近い関係にあるといつて大過ないであ

ろうと思う。とにかく和海に關しては未詳の部分が多いので後考に俟ちたい。

ところで、この追悼文をとり上げるに際して、困水の真蹟かあるいは偽書かを問題にすることが、まず第一の作業でなければならぬ。しかし、遺憾ながら私は困水の真蹟を他に手にしたことがなく、写真版や影印本との比較しか出来ないのやや不安も伴うが、古典文庫「色道太鼓」の困水板下と伝えられているものを見ると、筆蹟にやや類似を感じる。又、日本文学大辞典の「困水」の項に示された困水の署名、平凡社刊「俳人真蹟全集」

第二巻の短冊にある困水の署名は、三千風追悼文のもの

とよく似ている。困水の署名は「水」の部分特徴的であるが、いずれの署名もその部分で共通している。特に「真蹟全集」中の一つの署名は、三千風追悼文のものと同様である。そんなわけで、前述の三千風追悼文は困水真蹟であると断じて、まず間違いないものと思われる。

更に、この追悼文の出所のたしかなこと、困水真蹟を真付ける大きな要素となりうるであろう。この一文は、三千風の郷里松阪市射和の山本定次郎氏所蔵のものである。山本氏は、三千風が出た三井氏の縁者で、三井氏断絶の後、今に至るまで三千風の位牌や三千風の遺品類を

伝えており、その遺品類の中には、いくつかの三千風の真蹟や肖像などが含まれている。それら三千風関係の資料は、近い将来何らかの形にまとめて紹介するつもりであるから今ここではふれないが、団水に三千風追悼文を書く可能性があると見たならば、山本氏宅に団水真蹟が伝わったとしても不思議はないのである。そして次にみるように、生涯ただ一度のことながら、三千風が団水亭を親しく訪問していることから考えて、団水に三千風追悼文を書く可能性は十分あつたといわなければならぬ。

三 団水と三千風

これまでのところ、団水と三千風の交渉を示す手がかりとしては、管見によれば「くやみ草」があげられるのみであつた。「くやみ草」は註三元禄五年成立の団水編になる俳諧撰集で、団水を中心とした四十四、団水と俳人仲間による三十一の連句、同時代人の発句八十一をその内容とする。そしてその連句三十一の中の一つとして三千風、団水、千春の三吟（但し表八句のみ）を取っているのである。

三吟 団水亭に
是くや雉はた／＼と按麻

三千風

履帯慣ふ五月雨の暗

団水

それぞれの句の下にある風、団、春、風、団は読むことができ、色紙の左側に二行にわたる文章の二行目の終り二字は、「略之」とかすかに読めるのである。この色紙の内容は、明らかに「くやみ草」所収の三吟と同一のものであるが、両者の間には若干の字句の異同が存在する。念のためにそれらを指摘してみると、第一句目では「くやみ草」に「鷄くや」、「雉はた／＼と」とあるところが色紙では「鷄や」、「はた／＼と雉」であり、第三句目においては「くやみ草」に「腹の」とあるところが色紙では「腹は」となっている。

私は、この色紙をすでに述べた団水真蹟の写真版や影印本、それに団水の三千風追悼文と比較した結果、団水真蹟と断じてほぼ間違いないという確信を得ている。すると、この色紙は、元歌仙にもつとも近い形をとどめているということが出来る。そして、綿屋文庫本「くやみ草」における字句の異同は、梓に上せる際におこつた誤りなのか、或いは板本から書写された際の誤りなのか、将又、推版によつて改めたものなのかは、今にわかには決することができないにしても、「くやみ草」の本文はなお今後の検討が必要であるといわなければならぬ。

さて、話はもとにもどるが、この三千風、団水、千春

水漬の飯くふ腹のつよくして 千春

後の山はしらむ寒声 風

撫撫るかつらおとこのそゝけ髪 団

大事にかけて枯す鬮鉢 春

鶉鴿のなつく干棚の棚たかく 風

忘れて置は誰か前垂 団

右の引用は天理図書館蔵綿屋文庫本によつたが、綿屋文庫本は京都井筒屋庄兵衛刊の板本を安井小洒がペンで写したものである。

ここでやや話は横道へされるが、山本氏蔵の三千風関係の資料中に一枚の色紙がある。すつかり煤けてしまつて、書かれた句を讀みとることも困難を感じるほどであり、その上、左上方が引きちぎられたように破れている。ただ、第三句目までは辛うじて判読できるので、その部分を書き写してみると、

三千風

鷄やはた／＼と雉按麻

履帯慣ふ五月雨の暗

団水

水漬の飯くふ腹はつよくして

千春

そのあとに五句続いているが、ほとんど読めないくらい汚染している。特に色紙の左上方は判読不可能であるが、

の三吟がいつ行われたかについて、註四 宗政五十緒氏の

「北条団水年譜」によれば、

元禄三年庚午 二十八歳

○夏上洛中の大淀三千風（発句）の訪問をうけ千春

（第三）と三吟興行

とある。しかし、註五その論拠となつた「日本行脚文集」

には、団水との三吟興行を記すところがない（三千風の上洛は「日本行脚文集」によつたものであり、又三吟は「くやみ草」元禄五年撰に載っているものである）。

それに比して、元禄四年刊、椿木亭助叟編の「京の水」所収、助叟、三千風両吟歌仙二巻については、

○長崎稲佐江の楫枕に。水魚のむつび。片山助叟子は。

家風医骨さらなり。風雅に富。今なん都にめやすきま

じはりに物し給ふ。いずらや大路の袖ずりに。あなや

とうちつれ。同宿にさへなりて。むかしを語。両句二

巻互に小序して形見し。（統帝国文庫「紀行文集」に

よる。以下同断）

とあつて、団水との三吟も同じ頃のことであるならば、当然ふれるところがあつてしかるべきだと思われるのである。

しかし、この元禄三年の春から夏中、三千風が京都に

あつたことはたしかである。「日本行脚文集」には、次のように記されている。

○追京 此年（筆者註、元禄三年）の弥生の末。文集板行の爲。夏中在京し侍り。かなたこなたの知音に会し。即興の句。又入集所望の作ども。えんにふれ。おくればせに入侍りし。

一方、团水は、「俳諧大辞典」によれば天和、貞享頃大阪から京都に移つたとあるから、元禄三年にはすでに京の水に馴染んでいたと考えられる。後述する「鳴弦之書」にも、

コノタビ轍士京ニ住宅ノコハ元禄ノ始西鶴方ヨリ書ヲツケラレテ頼越タル故ニ随分ソレガシモ取持テ侍ツナリ借宅ノ事ハ柴田半蔵入道舎云ト申誹士ニ引合カレニ肝ヲ煎セ始ハ高倉四条下ル町ノ裏店ハウツラセケル

（引用は綿屋文庫本による。以下同断）

とあるように、轍士の京都住まいの世話をしてやるほど、团水は京都人になりきつていたのである。そして、前述の「北条团水年譜」によれば、この轍士の上洛は元禄三年七月朔日であるという。

こう見てくると、元禄三年という年が、三千風、团水、千春による三吟の行われた年としてそう不都合はないの

なお、「十とせあまりはや七とせ」、「あはて過にし年月」という追悼文中の言葉によつて、元禄三年夏以降三千風の歿年宝永四年まで、团水と三千風とは再び会うこともなく過ぎてしまつたことが知られる。そして、宝永四年春、和海の知らせにより、团水は三千風追悼の筆をとつたのであつた。

四 「花見車」をめぐつて

さて、この追悼文が俳諧史の研究にいささかのかかわりをもつとは、すでに述べたところであるが、それは「花見車」と团水との関係に興味ある問題をなげかけるのである。その問題に触れるまえに、「花見車」について概観しておかねばならない。

「花見車」は元禄十五年に刊行された俳書で、諸國の名ある俳人を遊女に見立てて批評しており、稀代の奇書の名に背かない。もちろん匿名で発表されたが、早く团水が著者の轍士なることを指摘し、岡田米仲も「観隨筆」でその著者が轍士なることを断じている。ところで、その轍士は「花見車」の「京の部」において次のように評されている。

△太夫 轍士

宗因第 大坂西山やのかぶる成しが、酒もなり手もりちぎ

であるが、それと断定するには、「日本行脚文集」に記載のないことが一抹の不安を感じさせていた。ところが、团水真蹟の三千風追悼文が出るに及んで、少々事情は變つたのである。というのは、この追悼文が、「十とせあまりはや七とせのまへに」团水と三千風の出合いのあつたことを示唆しているからである。三千風の歿年は、すでに述べたごとく宝永四年一月八日のことであつた。追悼文に「此春和海のぬしより此世をたち出てよもつの国にいたりぬと聞に」とあることによつて、この追悼文は宝永四年に書かれたものであるとみて間違いない。宝永四年から十七年前といえは元禄三年である。この团水の三千風追悼文が出るに及んで、元禄三年、三千風、团水、千春三吟興行す、という推論に大きな裏付けを得たわけであるが、ここでやはり問題になつて残るのは、「日本行脚文集」に三吟についての記載がないことであつた。しかし、元禄三年に团水と三千風が出合いを持つていたという確証を得た今は、「日本行脚文集」に記載のないことをそれほど苦にする必要はなくなつたと思われる。というのは、三千風が团水を訪ねたのは、「日本行脚文集」がすでに上梓されてからであつた、と考えても少しも不都合ではないからである。

はつ文 にかゝれ、あくぼがしほらしさに、京へつき出しは三勅の君也。はつぶみも客衆あまた見ふたり。つとめ心中はにくきみやこにながらへていさんすは、一座心中無心にのよきゆへ也。入ぼくろもよふさゝんす。風俗も入ぼくろは似てはりつよく、道中もよきほどに、むさろは懐しへといふ人もあれど、地によき大臣があるゆへ紙の書か、かぶりふつていさんす。紋日にもよく出らるれば、今の世のはやり太夫ときこゆ。（以下略）

（引用は俳書大系「俳諧系譜逸話集」下巻による。以下同断）

右のごとく轍士自身には、一点非のうちどころもないという手放しの賞詞を綴つていたのである。太夫位にあるものは、全てかくのごとき賞賛を与えられているかといへばそうではない。例えば、「江戸の部」における其角は、

△太夫 其角

桃青 松尾屋の内にて第一の太夫也。琴、三味線、小哥でも、とりしめてならはんした事はなけれど、髪生れついで器用な所があつて、小袖のもよう、髪つきまでも、つくり出せるほどの事にいやなはなし。国／＼にてもこひわたるは此君也。花に風、

月には雲のくるしみあるうき世のならひ、酒が過ると気づいにならんして、団十郎が出る、裸でかけ廻らした事もあり。それゆへなじみのよい客もみなのがれたり。されど今はまたすさまじい大臣がかゝらんしてさびしからず。(以下略)

(傍点筆者)

というように、ほとんど太夫にも、何か欠点を書き添えられているのである。団水は、「鳴弦之書」においてそのした轍士を難じていうのである。

太夫天神ヨリ以下随分褒美セシ者ニモ一失ツ、書ザルハナシ己バカリ露ホドモ誤ナシイカニゾヤ若外ノ人ニカ、セタラバ轍士ニモ壹一失ヤ百失ヤナカラン一点モ瑕瑾ナク書タヘアマリ手ノ見エタル事ナリ

このように、轍士は己一人を高うし他を遠慮会釈なしに批評しているので、註六 各務虎雄氏の「その見立乃至評判が、どの程度まで首繁に中るか否かは聊か疑ひなきを得ぬものもある」という言を俟つまでもなく、「花見車」にとり上げられた俳人の逸話を、全面的に信用することが憚られてきた。

近時、水田紀久氏は註七「『花見車』の価値と轍士の俳歴」において、「花見車」の再評価を試みられたがそ

の中で、氏は轍士の俳歴を概観したのち、

彼(筆者註、轍士)は極めて煙霞の癖に富み、その足跡は東海道、上方諸方面はもとよりのこと、遠く奥州、北陸方面にも及び、しかも、同一方面への旅を、繰返し試みているのである。(中略)その結果、各地俳壇の動静を仔細に視察することになり、(中略)当然、彼をして当時の俳壇の趨勢に通じさせ、宗匠切つての消息通にさせた(以下略)

と、轍士が「花見車」の述作に十分な資料をもつていたと論じられ、「花見車」の価値に関しては、

彼(筆者註、轍士)は、これら知人に対して、特にその品評を遠慮し、斟酌するというようなことはなく、むしろ、うすわらいを浮べながら、思うところを容赦なく言つてのけたのである。しかも、自らについては、先述のように、太夫の位に擬し、口をきわめてほめそやしている。こういうやり口自体、道義的には問題があるところであろうが、少くとも、却つて、彼以外の俳人については、案外、その見るべき所を見、適確にその特色を言いあてていけるのではなからうか。と述べられ、更に、

この(筆者註、「花見車」の)上梓が、或は北条団水

を怒らせ、或は其角との間に溝渠を生じさせたであらう

事実、かえつて、逆に、本書でなされた評判が少くとも、これらの人々に関する限り、的中している面を持つていふことを物語るものではなからうか。人は、自分の一番痛所(所)にさわられた時程腹を立てるものである。そして、本書の価値は、実に、このようなタブーに触れかねないところに求められるべきであろう。

とされて、「花見車」中の逸話は、資料として相当高い信憑性を備えている、と推定せられているのである。しかし、水田氏の論は、結局推定の段階にとどまつており、「花見車」をそのまま資料として用いることはやはりためらわれた。

兵 「花見車」の団水評と「鳴弦之書」

ところで、「花見車」において団水は次のように評されている。

△天神 団水(大坂の部)

小寄は

こゑがよきに、何をうたはんしてもおもしろく、

みやこのすまひならば、今ほどは太夫にも成かねぬ器量なれど、酒が過ては只一座があらく、泉様

きめさんした時も、すさまじきと沙た也。智恵はずんとかしこふて、楠にも北条にもまけぬ。

(以下略)

この批評に対して団水は、それが頼原退蔵博士のいわれるごとく、註八「野暮な反駁」であるか否かはともかく、ただちに「鳴弦之書」をもつて反論しているのであるが、そのことによつて「花見車」の団水評は、水田氏のいわれるのとは逆に、信憑性を疑われもしたのであつた。ところが、団水の手になる三千風追悼文があらわれ、彼自ら、もとより此道の先達にていとたのもしき諫めおほき中には、かりなき飲酒せしをたゞ器ひとつにさためよと十夕さかつきとることに忘るゝ事なく(中略)紅涙とまりかたきをおしやりて法華経を誦誦しあらかしめの諫めをおもひ出て酒を断事三日(筆者傍点)

と述べていることによつて、事情はやや変つてくる。即ち、「花見車」の中で少くとも団水の「酒が過」といふ記事は、事実にもとづいていふことができるのである。そしてそうなると、酒が過ぎた結果「十座があらく」なるというの、にわかには真実味を帯びてくることになる。そうでなければ、「器ひとつにさためよ」などという野暮な諫めを、いくら註九説教好きな三千風といえどもするはずがないのである。

さて、「花見車」の団水評が一部分でも事実にもとづいていっていることになると、「花見車」中の他の俳人の逸事の中にも、事実にもとづいて書かれたものが多いのではないかとということが想像されるが、それはともかくとして、団水評が事実に近いとなると、団水が勢い込んで「花見車」を論難した「鳴弦之書」は、どのような考えたらいいのだろうか。註十「花見車」は「大向ふの喝采を博すべき性質のものである」とはいつても、俳諧師ならびに俳諧を嗜む人達に向けての発言である。相当数の読者は、団水の身辺の者であつたり、団水の噂を耳にしやすいた読者であつたに違いないのである。そういった読者の間では、「酒が過ては只一座があら」い団水の酒癖を、目にし耳にすることも多かつたであろう。反論を試みようとする団水も、十分そのことは承知していたと考えて誤りはあるまい。そうなると、水田氏のいうごとく、「一番痛い所にさわられ」た団水が「腹を立て」て「鳴弦之書」を述作したとするのは、団水の心理を余りにも単純なものと考えてはすまいか。団水にとつて、自己の姿のある部分だけを取り上げて書き立てた「花見車」が、そう愉快なものでなかつたことは確かであろうが、その怒りにまかせて「花見車」の著者と考えられる

敬士に対して反駁することは、かえつて一部の団水を知る人に、真実を強弁で押し曲げようとしているという風にとられないでもない、とその際にものをいうことのマナスを十分承知してははずである。それにもかかわらず、団水は「鳴弦之書」を世に問うたのである。一体、何が彼にそりまでして筆をとらせているのであろうか。「鳴弦之書」は、東京大学付属図書館竹冷文庫に板本が、天理図書館綿屋文庫に筆写本二本が蔵されている。ただし、綿屋文庫本は二本間にほとんど異同はなく、共に題簽には「花見車評 団水」とあり、本文は墨付き十八枚の短いものである。

その内容は二つの部分に分れ、最初の部分は十一カ条にわたつて「花見車」を論難しようとしているが、願原博士もすでに述べておられるごとく、書院を所院と書いたとか、机を枕と書いたなどということまで一点としているので非難のための非難といえなくもない。又、後の部分では、

- 一、草書マサンク敬士ガ手跡也ト疑シ
- 二、今ノ都ノハヤリ太夫ト外聞ヨキヤウニ独歩シタル
- 三、心中ヨキナド、人ノコ、ロヲ奥モ見エヌ所マテ自カキアラハシテ自讚シタル

四、西鶴ヲ師ノ坊ノト敬タルハ大坂ノ俳諧等ノ知トコロナルヲ此タビ頭書ニ宗因筆子ト書タルハ自ラ高ブリタル不孝ナリ西鶴死シタレ撰神ハ在カ如クニ祭ルヘシトハ聖語ニアラズヤ亡人言サレバ奈何セン

五、太夫天神ヨリ以下随分褒美セシ者ニモ一失ゾ、書ザルハナシ己バカリ露ホドモ誤ナシイカニゾヤ若外ノ人ニカ、セタラバ敬士ニモ盃一失ヤ百失ヤナカラノ一点モ瑕瑾ナク書タハアマリ手ノ見エタル事ナリと著者の敬士なることを喝破し、その非礼不孝なる態度を難し、「俳諧好ノ癖トシテ増上慢ニウツリヤスク」とその慢心を指摘しているのである。更に、

宗匠ト云者ハ三ツノ徳ヲ備エテバナツケヌト云子細ハユメニモシルマイゾ

とか、十一カ条にわたる論難の後、一切種智ト云テカヤウナル下位ノコトマテシラ子バ宗匠ノ名ヲ得ラレヌトカヤ某モ幻妻位ホドノコトハ太鼓ハモタ子ト自分相応ノ働ユヘ見ゴト知テ居ルテコソアレサアキツトモ云テ見ヨ

と述べて、敬士の太夫という器でないこと、並びに団水自身こそその器であることを暗に言おうとしている。しかし、以上のような部分から、団水の「鳴弦之書」

は私憤にまかせて書いたものである、などという結論を性急に下すことはさけなければなるまい。十一カ条の論難の部分に、興味ぶかい箇所がある。

三十年来イマタ汝ガ一曲ト云ラウケ玉ハラス

と敬士の俳諧に見るべきものがないことを指摘し、世俗ニ云フ太鼓持也タトヘ今時表ムキハ俳諧師ナトノ名ヲ仮テ監版ヲカケ和歌ノハシクレナントノ指南ヲスルヤウニ見セカケ老若トモニ好色ノ門ニ引入酒ヲススメ異風異形ヲ好マセウキ世ヲハ唯カロク金銀ヲ瓦石ノ如クツカハヌヲバ風雅人ニハアラズナド、峻シテ

(中略)宗匠ノ太夫ノト云名ヲツキタガルハ。悉皆酒旗ヲ靡カシテ煎餅ヲ売尾頭表裏各別ノ生類ナリ

と、「花見車」の作者が太鼓持に異ならないと断言するのである。これは、団水が「花見車」において天神に据えられたことに対する、単なる腹立ちまかせのことばであると、一概にかたづけられるわけにはいかない。その点を見るために、少しく「花見車」を検討してみたい。

敬士は、「花見車」中太夫位にあり、又、例外的に欠点も無いすぐれた存在として記されている。では、その賞賛のよつてきたるところは何であらうか。それは、「はつぶみ」(三物)に客が多く集まるとか、「一座心

中」がよい（連衆に無心いわぬ）とか、「紋日にもよく出」る（俳席によく出る）ということなのである。そこでは、俳人としてまず問題にせねばならぬ句作上の優劣が、不問に付されている。

又、其角については、太夫位に据えながら欠点もあげているがその批評の中で、「琴、三味線、小哥でも、とりしめてならはんした事はなけれども、生れついて器用な所があつて」とその器用さをほめ、「酒が過ると気ずいにならんして、団十郎が出る、裸でかけ廻らんした事もあり。それゆへなじみのよい客もみなのがれたり」と酒好きを短所としてあげている。ここにも、よきにつけ悪しきにつけ、句作上の態度や方法はとりあげられることがないのである。

団水評に至つては、天神位に据えて、「みやこのすまひならば、今ほどは太夫にも成かねぬ器量なれど、酒が過ては只一座があらく」と酒の上での振舞が、天神位にあらねばならぬ第一の原因であつたかのような印象をさへ読む者に与えるのである。

ここでは、三人に対する批評にかぎつてながめてみたが、他の俳人達に対する批評もこれらと変わるところはない。批評は全て句作上の態度や方法に及ぶものはない

「太夫にならんせぬはたん気ゆへ也（林鴻評）」と、人と和することが太夫になる大きな資格になつていゝう工合で、「花見車」においては、俳人としての優劣を遊女と同じように上客（即ちよい門弟）の多寡によつて、或いはよい門弟を集める手腕や俳席で彼等に退屈させない手腕の有無によつて決定づけようとしてるのである。そこにおいて、句作上の態度や方法は、第二、第三の問題にすぎないのである。団水が天神にしかたなかつたのは、長くいた京師をなれ大阪に下つて門弟がへつたためであり、酒が過ぎてはいろいろ失敗して門弟になることを警戒されたためであつた。しかし、俳人の優劣は、やはり実作の上でつけられねばならぬ。団水が「一曲」を要求したのは、さすがにそれを知つていたからであつた。又、徹士を「太鼓持」ときめつけたのは、実作を二の次にしてたえずよい門弟の多寡を問題にし、よい門弟の御機嫌をとりむすぶことをよしとしている徹士の態度を、唾棄していることなのである。団水は、「鳴弦之書」中、一言半句も団水自身に

対する「花見車」の批評には言及していない。それは、「鳴弦之書」が私憤の書であつてはならないという慮りであるよりも、「花見車」の団水評を事実として認めてゐることなのだろう。しかし、団水は、その事実が俳人

のである。勿論、寸評というものはそうしたものだとす立場もあろう。しかし、結論的にいえば、俳人はあくまでも遊女と同列には論じられるものではないのである。

「花見車」は、評判記形式をとつたところが目新しく、衆目を集めるに役立つたであろうが、同時に又、そのいり形式をとつたことが、俳人批評としては決定的な失敗であつたといえよう。即ち、遊女であれば流行り廃りで位をきめることができるであろう。そこでは、客あしらいの上手下手は大きな問題である筈だ。それと同じように、俳人にとつてもよい弟子（ここでは、才能よりも富貴でパトロンのな役割をはたしてくるほどよいのであり、遊女におけるよい客との差は少ない）を沢山持つことが、ある程度俳人としての優劣を判断する目安にはなる。だが、「西山屋の内にも、ならびなくはやりたる君也（由平評）」とか、「はなしがおもしろさに客もある。また有しが、くいものにいやしとて、ちかごろはさびし（来山評）」と常に門弟の多寡を問題にし、「琴、三味線、小哥、手跡、三ヶの津におよぶはなし（一時軒評）」と俳諧以外の芸にまで評を加え、「地の客の見えぬは酒もならず、文盲で利口がなきゆへか（鞭石評）」と、すぐれた俳人の資格として適度の酒を嗜む事まで要求し、

としての資格を左右するものであるとは信じていなかつた。そして、実にそうしたことをいわんがために、団水は「鳴弦之書」の筆をとつたのではなかつたか。ところが、「花見車」が珍奇な形式をもつてゐる所為もあつて、予想外に世人に浸透している様子を見て性急になり、感情的になつた団水は、あげ足通りの発言までして「花見車」を貶しめるに急であつたために、「鳴弦之書」全体としての調子は低い。その低調さ故に、比較的正論を吐こうとしている団水の「鳴弦之書」は、俳人批評として失敗であつたが派手な形式によつて世人に受けた「花見車」の影にかくれてしまつたのであつた。

六 結び

新資料紹介、「花見車」、「鳴弦之書」と問題が多岐にわたつたので、少々まとまりを欠き、私の意図したところもやや焦点がぼやけたのではないかと慮れている。そこでこの小文で意図したところを列挙してまとめたいと思う。

- 一、新資料「団水の三千風追悼文」は団水真蹟である。
- 二、新資料によつて「くやみ草」の三千風、千春、団水の三吟が元禄三年夏のことであると断定できる。
- 三、「花見車」の団水評は、新資料の出現によつて、

事実に立脚していることが証明された。
四、「鳴弦之書」は、「花見車」の実作の上に立たない批評を貶したもので、けつして団水の私憤の書ではない。

以上の点を中心に述べたのであるが、舌足らずの点多く十分意をつくすことができなかつた憾みがのこる。終りにのぞみ、貴重な資料の閲覧を許された山本定次郎氏に、深く感謝の意を表するものである。

なお、本稿は、愛知県立女子大学において行われた昭和四十年年度秋期近世文学会で発表したものをもとにしてまとめたものである。
(本学大学院博士課程在学)

註一 和海が京都に在任していたことは、椿亭恕叟の三千風追悼文に「皇都の和海」とあり、自らが書いた「鳥羽蓮花」の跋に「洛下紅風軒和海」とあることなどによつて知られる。

註二 椿木亭助叟のことか。

註三 「俳諧大辞典」による。

註四 「近世文芸」第二号所収。

註五 堤精二氏の「北条団水」(「俳句講座2 俳人

評伝上)には、「元禄三年は団水にとつてかなり多忙な年であつたようである。「くやみ草」(元禄五年撰)によれば、この年の夏に仙台の三千風が来訪し、千春との三吟を興行し」たとあるが、「くやみ草」には三吟の時期を記すところがない。

註六 「日本文学大辞典」の「花見車」の項参照。

註七 「連歌俳諧研究」第五号所収。

註八 「俳諧論戦史」(「俳諧史の研究」)

註九 「日本行脚文集」中にみえる「道歌の百首」、

「伊呂波歌」、「児童往来」などは山本氏宅にわずかに現存する「伊呂波歌」や「慎日用」などから推して、説教臭の強いものであつたであろうと考えられるし、又同文集中の数々の逸話が三千風の説教好きの一面を伝えてくれる。

註十 「俳諧論戦史」

大鏡注釈ところどころ(二)

松村博司

○いみじうけだかきさましたるおとこのおはして(八六頁)

大宰大貳藤原佐理がその職を停められ、都へ召還される途中、伊予の大三島明神から神号扁額の執筆を依頼された話の箇所。この「おとこ」は、橋純一氏の『大鏡新講』に、「僧に対し俗人を男と言う。ここに人と言わず特に男と記したのは神であるから僧形でないことを知らせる為であろう」と注された。古語辞典の類でも、

西行法師をとこなりける時(十訓抄・八)

やすら殿は、をとこか法師か(徒然草・九〇)

をとこも法師もいとまなく(増鏡・九)

等の例を挙げて、「出家している男に対する語で、在俗の男子」と説明している。この他、『榮花物語』巻十五疑に、

まづは先年に長谷寺にある僧の、御祈をいみじうして寝たりける夢に、おほきに厳しきをとこの出で来て、

「何しにかとの(藤原道長)も御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の仏法興隆のために生れ給へる」とこそ、見えさせ給けれ。

とある「をとこ」も同様であろうし、『今鏡』(御子たち、第八、腹々の御子)に、崇徳院から寵愛されて、重仁親王を生んだ「内の女房」のことを記して、

まことの親(法勝寺執行信縁)はをとこにはあらで、紫の袈裟などかけ給はりて、白河の御寺の司なりける。とあるのも同様であろう。これらはいずれも僧に対して俗人を「をとこ」といった例で、大鏡とまったく同じ例は未だ見出し得ないが、釋釈としては新講の通りでよろしかろう。

○法師東宮(一〇二頁)

法師になられた東宮の意で、早良親王のことという。従来注釈を踏襲したが、これは誤で、「法師であつた